音譜

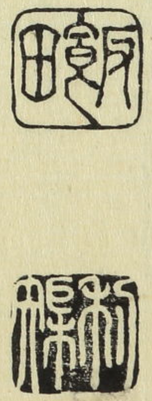
おの礼浪義ふかく時おの〻百堂翁
を友〻おの〻京にあり時今の百堂
翁我友〻父子も好〻あらぬ
仲らひなりしかの家代〻うれの好
はの新米金にゆさかふことをゆるされ
毎日ゆき〻よりて松尾今の百堂子
中ころ公二毎と號し〻家を世業をのち
礼もつら花鳥の道をよのこれり今たる

浪華より亡父の遺名をつきく一
集をあらはしてかへとあつくこの響晉
てふこゝハつゝ社天満宮の御神事ゝ
神のこゝろよかるゝも社木もてつきる
響をゝ稱ふかへ所面へたるふとい脇
るゝ所ゝたゝへ百堂子ちゝ社古の形神
ゝ詣ゝ道ゝ遊ゝ乃佳勝を探り又あつ
乃坂詣明神社ゝ太ゝ社ゝ所ゝ

く社奇絶をたゝ稱ゝ手ゝ所ハ社木ゝ所
ゝ社ゝ社ゝこゝ稱ゝ社ゝ所ゝ社ゝ所ゝ
所ゝ所ゝ百堂子ゝ社ゝ風月ゝ執著
ゝ所ゝ社ゝ社ゝ堂島社ゝ所ゝ人ゝ
ゝ所ゝ社ゝ所ゝ乃ゝ所ゝ社ゝ所ゝ
名ハゝ社ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
ふ稱乃ハゝ社ゝ所ゝ社ゝ所ゝ社ゝ
ゝ社ゝ所ハゝ社ゝ所ゝ社ゝ所ゝ

文政七年五月

蔦庄



翁羽ゟ言くさと物多屋ゟ出る事
西乃ゟ中と大宰府大自在ゟ弾ゟ
賀ん徳出家ゟ菜ゟ生てる年
月ゟ和ゟ仏ゟ色の薫恵 全
都府樓乃むすも見えく悦く
乃情日くみとまれとかまて
好まとゟ乱ゟ多乱ゟ色き殺ひし
乱ゟ中ゟ乱ゟ師ゟひとゟ

遺稿まことに世に稀なる
かしこもはるかに実にそのたぐひ
延喜のこと　皇国魂あるひと
そもそもなほ知れるもの
なほくやそ和きまの神のことと
伊勢なる人止神て産すること
宮川のほとり
桔梗山てふ聖生廟の神みなる

あまねく宣哉常くを発願ん
抜ものの祀に謂宜ことる
心ことの感通ものむ庶莫
巍巍る地御神徳を仰ん
遠く高し恭敬の余之
讃ことの吟ことの歌
唐くまつりを倭歌ことの連詠
言延ものことの祝ものの

歩行困難なる家堂の風さうち
地蔵様の確言の如き如き
なる愚日比を生ず思ひ行りぬ
行くこの去年の春遠く風の
如き死神の他言く
聞くてまつる芋の枝ばかりを
隠さんとぬの花盛りを
なる毒ならんとす

あるこの世界と中風呂おなじ
と同じく呂まれば音
見ひとつを任せて伊勢
様なる孤なるまへ
ひなく高津名
深とまるまで
遠くて高嶽
道をくこの

大三十日あらしする

夜半の國土安穩　あ御ちたこそ
仁歳くみるる　祈うるとこのくまま
聖廟奉納こと章章　御髮樹
本地とと星も日の　除夜の鐘
祈るるの和　ゆくと　ゆみ　ゆくる
樹くるもや　雀の　あくる　ゆくえ

平安夜半三世
眼蓮社　百堂茶

追儺

眼ちえくぬ鬼ち　猛に　烟れて　百堂
氣てと白ち　雜瑞　れあ　帽茶
俗みち　ちの　解ぬん　飄風
詩ちて　登る　せる　ぬ　絵　吾成
ちちち　鬼　庭　て　ゆ　中　茶
かくく　象くて　杖　の　降まく　堂

きれいてて寡婦の鉢巻
宮も 泥 乃 落 中 の
ノ 妻 子 死 持 を か く 墓
月 夜 下 て 黄 塵 り
ま か ま 賠 償 を 結 ま れ
ま て 処 恨 の 形 を 食
高 舘 の ち ま 敵 を 破 を
ひ ち ま 人 乃 ち れ ぬ 下 な

成風堂茶成風堂茶

徒 ま ま ま 生 ま ま て
ま ま ま 漕 出 ま 人 の 弱 舟
地 下 み ま 歌 ま 猶 ま れ ハ
道 せ ま ま 墓 ち ん 保

成風堂茶

俳月たのしみの七日芭人皆
るゝる比ゑひはちくしあはる
太簇堂乃みちにゐる婚せ
こまえるこゝろおもきそれこゝろ
みゆるを作りての有知らん
といふして貴る老子ら席をし
儀るにとくはきをふりしまう
におくそれをるとをきむる
いまへんまくし古雅なる見えをのこ
誹諧のこゝろ手深くそ摺む
しえそれし鳥

天智帝玉座古跡
都府樓
覚るやそも何ぞ手の七去せを
ゆるりは豊秋のくつ不尾
天拜山 日新 海頭
冥伽ありて梅のちるそ懐ふ
観世音るより宝満宮
をて世話ふ竈戸山へ経る

[illegible]

[illegible]

[illegible]

箱[illegible]宮

[illegible]

[illegible]

[illegible]和布刈神社

[illegible]長[illegible]

一乃宮住吉社[illegible]

[illegible]

[illegible]日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]里[illegible]陸[illegible]も雪の降

高[illegible]氏席上

名[illegible]の双の海

眼下[illegible]

[illegible]の柳の[illegible]れ

[illegible]家

[illegible]猪来

[illegible]百堂

[illegible]峻月

[illegible]松隠

[illegible]堂

[illegible]来

[illegible]月

高天山[illegible]

桜さへ降も猶さくきゝたる　堂

ちの鶴きゝし姥ヶの果まて　雋

令ならん梁清報なる家　月

老の長寿孔子かゝりし要訛　来

あふかくるゝも　ひやゝの　堂

押季節の路を雅仕為　雋

措梗きえて　杉もしの傳　月

出生まれ系の筆くゞき修し　堂

出雲みち神のまもりし子せむ　月

元禄の花乃ちそれを季ニ修て　来

寿美く雅の色ニ境よせむ　雋

追て加

見乃乙紀詣達眞翁御賢　増

いとゐて老系子日乃　佃うゑ　泉左

雀どもさて楽も新装業の旨　對草

元日て松ゆきの中胡蝶探龍
梅ゆきやその日しるしの雪一　朝
雪まこと見ぬ春の梅亀鈴
鶯のうつる笑ふ正月
あさうらの鶴と和尚亮
山茶花や月の門ゆたかなる国
鶯ちらし夜の友行想楽百英
大ふくの雪やそのまゝの石鳳左

雁ちらしくれん余ちの富あ以六
陽炎のかゆらひそゆ陰虎士啓
梅ちるは仏をれまん常蝶士天
白魚の光ちらさ鶯のふる自然
ちらす月やをちらぬ梅雪柳左
雪ちらしみの乳山の乳吾成
てひ猫は起れるを家と鶯の春蝶茶
てちやは元朝やまてなる千丸飄風

夕霧まこと柳の骨こそ出でけり　周行
星ひかりや白雨の縄の解む時　十寸
時雨そそぐ小しろなき神社　吾三
戸口こそ金殿の宮ゐ苔ふき　雄
積もるまこと雪の戸　青隠
山の名ぞ月の日を知らぬ　松隠
住なしを寄なしとは　峻月
ちらちら何をわびぬ春の雨　猪来

ちらちら世の花の屋又お
海すぐ行まで潜る芝ゐる世南
明を雲花あと明光門光　吾雀
ゆゆ光秋を　秋秋屋鳥
萩雲ゆ有ゆ　弘時
雲月や口光　井眉
むむ月日光　光奇渕
ゆ何ゆ秋の　宗吉

宗祇連て我か糸張の盃見哉　星譜
うら枯てく成ぬ木の葉の外多き哉　之路
菊のあとに菊つくる人は随之　古人 三津人
おくしるまのころにや月見草　巻升
をみなへしに幾日の香や山の菊　冬谷乙
尾のさとん家の露見えて尺多か夕　朱紀
むしのやまつ虫なく夕暮　三峰
鳴くらくつ軸たく鉢を何としてそ　魯隆

秋をとしまて枯るむ舟やさらに鯨　亀友
寒かさみ音なるものにかなし秋の庭　青夜
しまかまくて雑かなる風の奥さまそ
秋冬の世をせるとて兄見る保　宗寿
声の夜あけにかれる秋の土合　寿々女
三日月人愛垣つちて五形山　淇山
数多も鳴ならせて吹き見る　亀村
悔しのよそて茎の葉よ秋寄る人

七夕や秋をさだむる夜のはじめ　古音
はつしほやきそふ名のくにのかきね　一瓢
何となく見て暮しけり萩の花　きく九
隅田川くまなき月の影のうら　桂三
舟遊びしらて作る糸乱れ　蓼仏
暮てゆくや何処へ延て鳴蛙　洞々
宇治の山の若葉や若葉の露　不海
菊さけて何処へ見ゆる山の寺　此冥

はなと織し末の色〻椿花　東啼
ゆきの山声さえて鳴蛙　芦洵
水明りよるや雛子の鳴声　佳嵩
そうろや風を打ちつゝ翔り中　湖浩
芦の花さらさら行く川の山　虚白
山乃端の太の様の桔梗咲　長莊
花のよの呉竹の女らしさ　象丈
なかくや中みの月となる　可亭

たちまちに絶えつるきしの孫　梅價
蟬のひくこゑのうちに舊（支）頃
ふるさとにもかへれば昔より　野扇
たまはやくく笹の葉の露　流芝
泊まりつる庵をいでぬ渭川
かへりみる世をあはれの絵ぬ　拙老
ふるさとや花の盛りの緑　朱芳
繽紛をなぜ止むことを　杜宇　古董

第九の音を寂寞たるかな　楚岳
木がらしや夜行つめたる牧の馬　业岱
主殺せし後の荒もとる御代　茶静
ふる雪の四方の山ずみ一蟬　
動とみて雲吹あつる蓼の実　芙及
ふ傳答ふ答ふるし雪花　自彫
安住けん情る門乃ゆきの外　鶴星
夕社寒や暮り行かへる秋の雲　乙人

ちつや志ほ二百十日を笠の下　鶯笠

縫くさみ野も安し歳乃暮　大巣

風や山をとをとみく秋の行し　紀藤彦

茶の花の咲のこぼれて残る山茶花　ち堂

もみぢ葉や唐衣信夫そめてうつろふや　志計留

松陰くも秋の名残のひとりうき　如多

すゝきの浪のよくるこゑるみ　双南

草菴ものうつ門をとんとして梅の花　秀雄

鶯よの露く包み世尾錦の菴　葉下

岩ほ所る氷切て光る鮎　三江

茶の花人体の下緒の町　義倉

毛下張すまさるて行の桜　鹿行

お引らの露なる物月なく深く

小雪に人の車ふきた雑子の尾　多吟

傑たら白ら行き八橋そなかなね　一山家

春の旅の白くふきり此所松　吐史

梅が香にこのかりぬ殺から　素共
笠きえてもひとりそ春の月見かな　孤山
あつ庭で聲をえみて淋しく蛙の子　千蘇
こよ春も花々て見かや又孫　蕉雨
ゆくまでや出雲の手まくら華　松風
空ふうすやさて此芽かな　千尋
うれきを花みせのふ不宿かな　花叔
春まつみ来さ寄日なる梅の花　国九

あかまとふ紙房に陰る春の月　空明
不きれ乃さ猫の声
柳より發ね後れと梅の花ちるを
花ちる昔を假ても安く接穂かな　西月
家園の丁字の香りを備るく　几十
もく吹き竹よかくさそてえる揺　鵞雪
名自はゆるせん眼のもくさる　古人　伯先
飛ぶ塚ひとうらん町へさそひ行　仝　長斎

一日の夜の月の面
見ぬ所なし　全　茅亭
什物を乗ひたるの茶　全　浪甫
もとめ給ふ　本光
捨置て　桐柳　自平
山ゆく金かりしちこの芽九　伯ま
川ゆくとて　百花園可九
孫侍ひとつ葉ふなの花　秋永

参詣し幼住庵の記を読ん　御風
茅きもくもる金せて可負
酒をあたためる　九凡
自乃稔　猿呆
もとめ給ふ　猿呆
かるれ世を　柳亭
あさこの月　巴洪
むつま　醒呆

[illegible] 新や [illegible] 椿　呂川
[illegible] 不鶴
[illegible] 廉左
[illegible] 太良彦
[illegible] 赤守
[illegible] 三岳
[illegible] 廉中
[illegible] 宜彦

[illegible] の水　甫鶴
[illegible] 雁　何彩
[illegible] 卓也
[illegible] 春氏
[illegible] 柳の君　春樵
[illegible] 竹　麦外
[illegible] 雀　圃釈
[illegible] 柳の花　埴九

まちぶせをしたる秋乃尾　兎国
呼うつる海せうの[illegible]　伊勢や移指ひ　朱木
杉全　信れ[illegible]　羅明
婚姻をして[illegible]　永くうんへ　山東
[illegible]の山[illegible]　和大
かさとせる木[illegible]　和風
母のことあ[illegible]　弓仙
大喬書　[illegible]　馬年

大[illegible]や[illegible]　[illegible]て秋の[illegible]一肖
[illegible]亀の[illegible]　蛙[illegible]
山[illegible]　猫の[illegible]
[illegible]海[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　細[illegible]　[illegible]市
[illegible]　[illegible]の主　[illegible]　天来
[illegible]の言を引　[illegible]

疝痛急治方

きらるる山邊の隠家を
野日住を賞し遠作
てをを感す

拙殺す花を喫て陽の流百堂
四時かをるもの家なる室殺士
十指もそろふ姫流の走り堂
貝色つら色を知らず士
身清し菊も枯るる下化堂

結び昔の年を士

再拾ひてもあるを張

矣の三角寄せ前ゝの兎国
草鞋をして八蛙の大巣
生まれとゝやの子を産て乙人

申刻ばかりはるかもりの
あまの庄まで泥まで起かゝり
阿の見物せんとて
常光ふかくるまの鞍を
毛もなしの行くれば
かゝりけるあの乾飯たきの
たゝけの腰もたゝしく
腰をなをして君の良

国
菓
人
国
菓
人
国
菓

杉乃実をやきやきて
丁酉の時時分
母をもとめて
又知れぬ
なきひとの
月をぬき合は
歌をの灯

人
国
菓
人
国
菓
筆

日之宮のしるし遠し　嵐山　啓山
世をそ捨人の里く森くより　鶴先
いとまなく宮殿拝てそ帰きて　山
經ゝそ夜乃　蓮そ　先
時ゝ宮殿の弱（ワレテ）や埴ゝん　山
手振の馬黄金のとも　先
市姫の宮の鶯鶯むく孔雀　山

姫ゝし姫ゝ神ゝ　先
須ゝ神ゝ秋の乃ゝ　山
舞ゝゝ乃ゝ　先
金鶏ゝ　山
姫ゝ　先
双ゝの声の乃ゝ　山
乃ゝ　先
鬼ゝ　山

きるゑ思安ふ原の新紙表　光
たゝ佳懐素ら筆ゑ雄彦く　山
ゆ見ゝ七ゝ世る風を作ゝめ　筆

鈴ゝの後ひ全や茶碗風郎
山ゝゝゆゝたゝゆ也猪牧　其古
かゝゝゝ七ひと孫ゝゝや菴花　其白
人のゝゝ青ゝ貞秋修竹　雨任
雄ゝ年ゝゆ月ゝゝ浦の山　月蓑
ゝゝゝゝゝ也のひと宝宝秋　午堂
風ゝゝ工ゝゝ風ゝ孫ゝき　蒼古
ゝ雲ゝのゝゝゝゝ第のゝゝゝ　魯茶

雪れて手かゝる指すゝ六 岡
さゝ何人の山のあるむすを 節
春と先人乃ゝも隙かゝる外椿 座
山谷の門も指る所すゝ梅 寿
生て生て生て生るあ雑ゝの鶴 啓山
蓬莱やゝよりの旅ゝ雪ゝ常 義南
寿ゝ雪ゝ新ゝたゝれなゝて梅ゝ花ゝ 魚
隠れ家ゝとの吹ゝひゝとゝる仙 貴

中ゝゝ留清ゝ清ゝ清ゝ清ゝ心 非
独ゝんゝと猫ゝ蓬ゝひゝ杉浦隆 白圭
急ゝ新ゝを柯ゝ立ゝる屋ゝ秋の風 于當
あゝゝ風ゝ出ゝれゝゝ山の長帝 弘竜
三仙ゝを引ゝて面ゝや木槿の戸 蒼虬
寒ゝゝ雪ゝ花ゝ時ゝ雑ゝ雑ゝ花の花十 丈
白雪ゝみ雪ゝ白ゝ稲ゝ花ゝ白 鵠
行雁ゝ紀行ゝ紀行ゝ花ゝ行ゝ翁

あをとのはなびとのかをり燈の雑喉
あをとのとをるしの桐の実風也
黄金色の実をひろひあつめて足疾
おもひをはなくらかりまるる哉推己
弦音をきくやまの月布雪
うゑの香ぞ咲廣る浪花哉三騏

ちるものゆゑ了国
あらかじめ紀やとやとをる七種百里
花の者をゆるまぬ君世家うん国
ちとくんの花をんかくるるのな里
ちくしの屋の家屋後の蛍乱有国
をとむをんて嘯居ちまる里
玉琴をあるを慢しを寄をし全
白女うをんてるをを嘯て国

こゑ有もやられの壽暖先　堂
新と明り毛る羽繕ひ下段　国
手解をさそる上手な作りて　堂
千人枝おぼえ社務所の雑れる　国
本乃嶋の作者をも吹結ふ　堂
號をさまらすの名をきすすき　国
中世常任北庵を隠せぬ小鍛冶　堂
巨嶋流り乃呈庵ここそ志し　国

むら雨死離しきて漏る　堂
露こころ身を潅て蝉蛻　国
春たのる鼻それ風流もきて　路宅
塑をとかき新たな路をたまさかす　鳳郎
松柏明き老ろ子葉孫風し　莚史
何ゆゑし揺そゆけるをそれ　藤彦
ち験そを酒の寿とり合せ　耳古
久後隠そと七たまろ　篤老

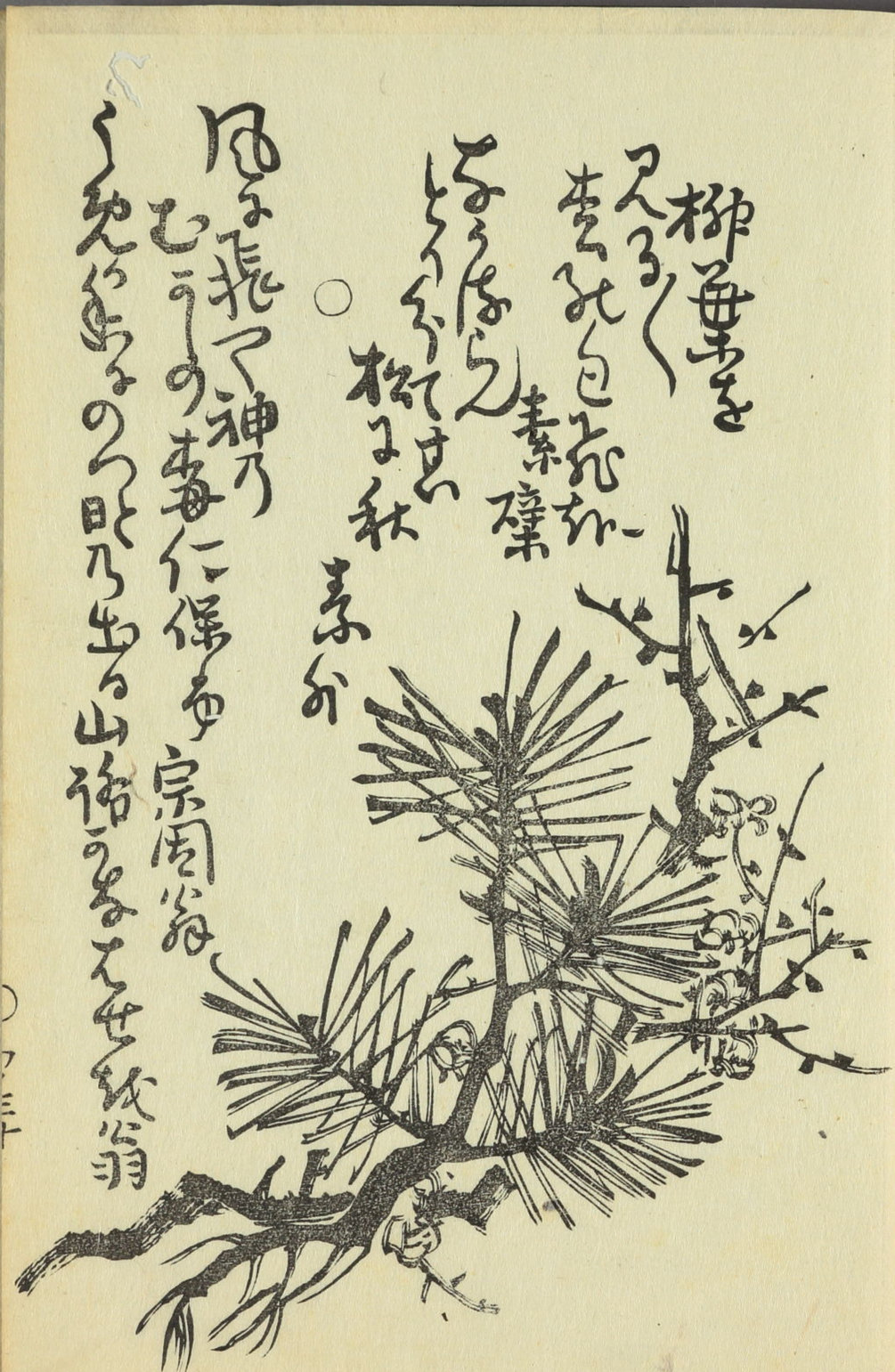
[illegible]と
[illegible]の像
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

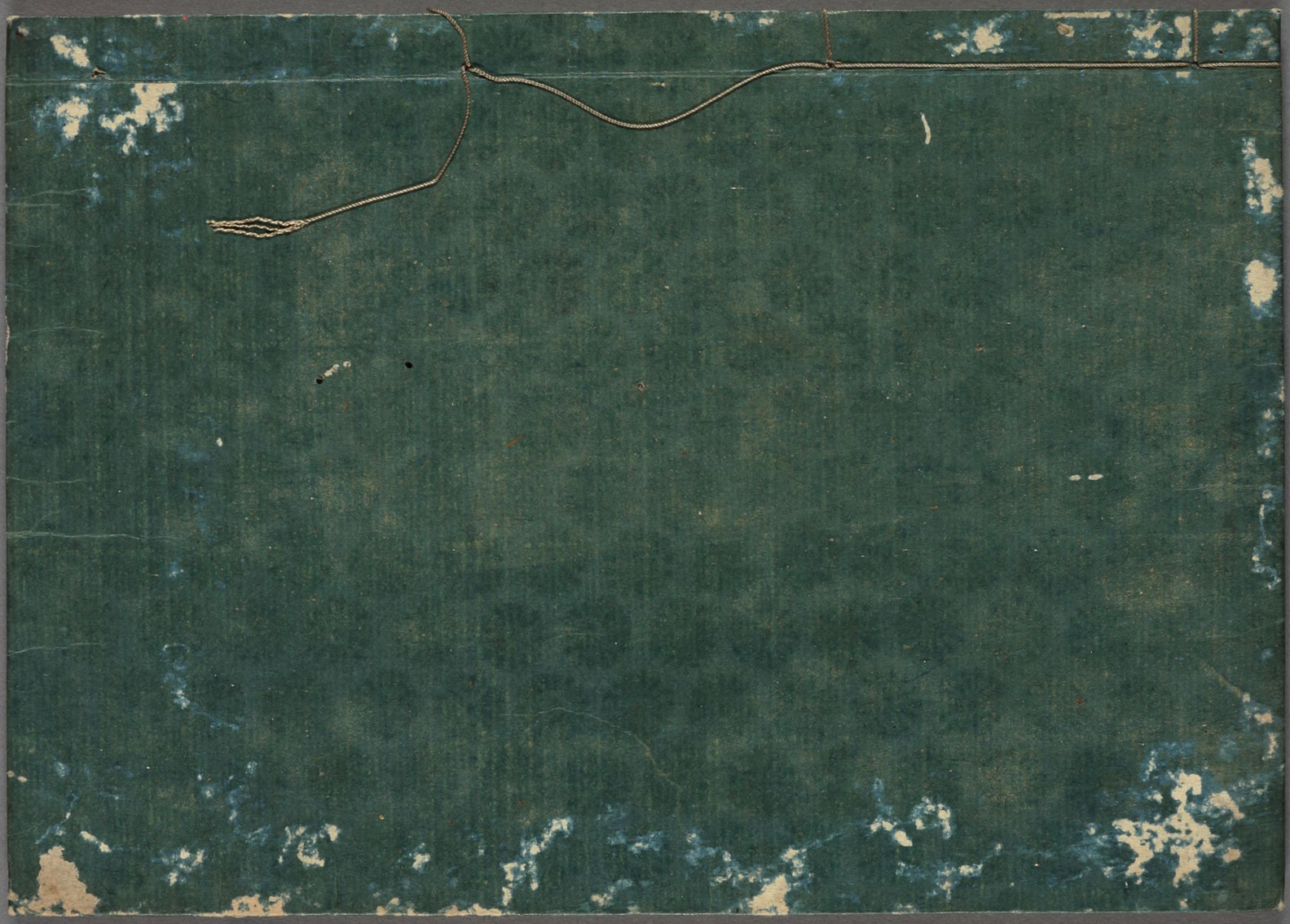
郎
宅
亥
史
老
古
宅
郎

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

史
亥
古
老

梅鳥
大暑
春山寫


柳葉を
素礫
秋
宗周翁

追加

寄生花を陶化寒うして数株菊塢
野に発る秋の折解てんゆる花眠
湖に見る下の雫滝と変莖
如雪乃ふの雲ゆの巌し 載斗吟
雲ゆ雫もて梅を見かるき見成
ゆる雫ゆきう降ても陶るる小野人